

四人のK : 名前に見るカフカの戦略

下園, りさ
九州大学大学院人文科学府

<https://doi.org/10.15017/2229666>

出版情報 : 九州ドイツ文学. 30, pp.39-52, 2016-10-31. VEREIN FÜR GERMANISTIK-KYUSHU
バージョン :
権利関係 :

四人の K — 名前に見るカフカの戦略 —

下 藪 り さ

はじめに 匿名の主人公

カフカの作品、とりわけ長編小説において、名前は特別な意味を持っている。

(K は醜く、ほとんど不快に感じるが、それでもなお私は K と書く。K は非常に私に似つかわしいものであるに違いない。)¹⁾

カフカが残した未完の長編小説三作品に共通するものの一つが、この「K」である。『失踪者』のカール・ロスマン、『訴訟〔審判〕』のヨーゼフ・K、そして『城』のK。ヨーゼフ・K と K は K という共通の名前を持ち、彼らの名前とは一見何のつながりも持たないカール・ロスマン (Karl Roßmann) の名前も、同じ K で始まるという共通点を持つ。このような共通性ゆえに、プロートは三作品を「孤独の三部作」²⁾ とひとくくりに掲げた。

そもそも文学作品において固有名はどのような役割を果たしているのか。言語学者のデープスによると文学における固有名は、名が体を表すような説明的な名前、名前の持ち主を宗教や地域別に分類する名前、響き重視の名前、そして実在の人物などから採ったもしくはそれをもじった名前、の四つに分類される。³⁾ このようにしてつけられた固有名は、作品中において同定や虚構化 - 錯覚化、特徴化、神秘化、符牒づけ - 匿名化、という五つの機能を持っているという。⁴⁾ 例えば、名前に対する考察が繰り広げられる『家父の心配』のオドラデクは、この分類に従うと、名が体を表す型に当てはまる。その名前はオドラデクという得体のしれない存在を作品中で同定すると同時に、特徴化している。生き物とも何とも判別のつかない不確かさが、語源的にも説明のつかないオドラデクという名前でも言い表されているのだ。

長編小説の主人公たちの名前はどうか。彼らに共通する K はカフカを代表する名前だと言って間違いない。とりわけ『城』の K の名前を、バッハマンは20世紀的な、「名前をつけない」⁵⁾ 主人公名の嚆矢と捉えた。「名前をつけない」、言い換えるなら匿名的な名前をつけることは、名前の省略と同じようである。その一例として、例えばクライストの『O 侯爵夫人』は、身分の高い人々のスキャンダルを伝える内容上、名前を伏せたという体裁をとっている。それゆえに、主人公のみならず他の登場人物や地名までもが、具体的な名前ではなく敬称やイニシャルのみで伝えられる。他方の K が主人公となる『城』では、舞台となる村の名前こそ明かされないものの、主人公以外の登場人物は些細な人物に至るまでことごとく名づけられ、しかもイニシャルでないきちんとした名前を持っている。⁶⁾ 唯

一主人公のみが、「素性や環境、様々な特性、あらゆる責務、あらゆる由来」⁷⁾を明かす名前を持たない。O 侯爵夫人の省略された名前は、名前を伏せているという点では匿名的ではあるものの、その名につけられた敬称は主人公の「素性や環境」を明示し、名前と同等の役割を果たす。同じようにイニシャルからなる名前であっても、両者は本質的に異なる。

長編三作品において、主人公たちの名前は主人公を指すための単なる記号ではない。彼らの名前は物語の中心にあり、そこでの名前の扱われ方は、カフカにとって名前が単なる名前以上のものであり、彼の創作全体に関わる問題を体現していることを示している。何よりも K とは作家カフカのイニシャルであり、彼が好んで署名に用いた名前なのだ。本稿では、カフカ文学における名前の重要性を裏づけるために、カフカ自身ならびに彼の作品と固有名との関わりを追っていきたい。そのためにまずは三作品『失踪者』、『訴訟』、『城』における名前の問題を概観し、それから、カフカ自身の名前との関わり、とりわけ署名との関わりを見ていく。

1. カール・ロスマン——『失踪者』

三人の主人公のうち最も若いカール・ロスマンを、ベンヤミンは他の二人よりも「より幸運な K の姿」⁸⁾と呼んだ。その理由がカールの名前にある。三人のうち唯一「完全な名前を持った」⁹⁾彼は、最終的にその名前ロスマン (Roßmann: 馬の男) にふさわしく、競馬場に行き着く。だが、ユートピア的なオクラハマ劇場への入り口となるこの場所で、カールは名前を失うことになる。

1-1. 名前の喪失

カールの名前は物語の各段階で繰り返し確認される。物語全体は、カールの受け入れと放逐という一定パターンの繰り返しによって構成されており¹⁰⁾、アメリカ到着後のカールは、上院議員の叔父の家からニューヨーク郊外のポランダー氏の屋敷へ、そしてホテル・オクシデンタル、歌手ブルネルダの住居と、次第に西の方へ、つまり内陸部へと移動していく。そして移動の度に、自分が何者であるのかを証明する必要に迫られる。

作品の舞台となっているアメリカは、「彼がこれまでにしてきたことは全て忘れられ、誰もそれを理由に彼を非難しようとはしない」(KKAV 388) 土地、来る者に「新しい経歴」(KKAV 15) や第二の「誕生」(KKAV 56) を約束する地として捉えられている。だが、カールが出会う現実はそうではない。ニューヨーク港の船上というヨーロッパとアメリカの境界で過去が暴露されることで、アメリカでのカールの経歴もまたヨーロッパといわば地続きであることが明らかにされる。その一方で、「心からのアメリカ市民」(KKAV 38) を名乗るカールの叔父は、アメリカ・ユートピアを体現した人物であると言える。

ところが、船上にまで迎えに来たこの叔父を、カールは叔父と認めることができない。というのも、カールが知る叔父とは名前が違うからだ。名前についての説明は一切なく、ヤーコプ・ベンデルマイヤーというドイツ風の名前を持つ叔父とエドワード・ヤーコプも

しくはジェイコブという叔父を名乗る人物が同一人物であるのかどうかを知ることはできない。叔父はドイツ風の名前を捨て、新たな土地にふさわしい新たな名前を手に入れたのだろうと、カールは想像するしかない。この新たな名前ゆえに、叔父はもはやドイツ人ではなく「アメリカ市民」なのだとも言える。

名乗るやいなや、「あなたはドイツ人ね、そうでしょう？」(KKAV 171)と問われるカールの名前もまた、彼の出自を明示する。ところが、勤め先だったホテルを追い出されたときに事態は一変する。すなわち、パスポートをはじめとする一切の所有物を失い、彼は自分の名前を証明する手段を失う。そうして行き着くのが、オクラハマ劇場の入団試験会場、クレイトンの競馬場である。

1-2. 新しい名前

全ての者が受け入れられるとされるオクラハマ劇場は、ユートピア的な空間としてのアメリカを具現化した場所である。このいわば第二のアメリカに足を踏み入れたとき、カールは自分に新たな名前をつける。

しかし、彼の名前が尋ねられる段になって、まだいささかこの件は延びることになった。カールはすぐには答えなかった。自分の本当の名前を名乗り、記録させることにしりごみした。ここでどんなささやかな口でも得たなら、そして満足のいくように勤め上げさえしたなら、そのときには自分の名前が知られても構わないが、でも今はだめだった。あまりに長く黙っていたので、もう今となっては本当のことが言えなくなっていた。この瞬間、カールには他の名前が何一つ思い浮かばなかったため、以前の職場で呼ばれていた呼び名を名乗った。「ネグロ。」(KKAV 402)

カールは名前や出自を証明するものを何も持たない。書記によって書類に名前が書き入れられたことは、カールが再び自身を証明するための手段を手に入れたことを意味している。だが、その証明は以前のものとは全く同じではなく、カールは新しく「ネグロ」¹¹⁾としての存在を獲得することになる。

「ネグロ」という名は、単に新しい名前であるにとどまらない。この名前はオクラハマ劇場にたどり着くまでのカールが社会の最下層に身を置いていたことを示唆している。オクラハマ劇場には、そのように社会に受け入れられなかった人々が集まる。カールも、そして競馬場で再会するかつての同僚ジャコモも、ともにアメリカで生活の基盤を手に入れることのできなかつた者、アメリカ人になることのできなかつた者である。この作品でアメリカ人と呼ばれるヨーロッパ起源の人々とは異なる「ネグロ」の名が暗示するのは、アメリカ人となることなくアメリカにとどまるという、もう一つの道であると言えるだろう。「ネグロ」と名乗ることによって、カールはアメリカにいてアメリカ人ではないという異質な存在となる。¹²⁾だが同時に、カールはユートピアとしてのアメリカが約束していた第二の「誕生」を手に入れるのだ。その一方で、故郷とのつながりも維持される。つまり、ジャ

コモがカールをカールと呼び続けることによって、彼の「本当の名前」が保持され続ける。

2. ヨーゼフ・K——『訴訟』

新たな名前と新たな生を手に入れるより以前のカールと同様に、ヨーゼフ・K は名前に縛られている。

以前はいつもどんなに堂々と自分の名前を名乗ったことか、と彼は思い起こした。しばらく前から名前は重荷になってしまった。しかも今では、初めて会った人たちが自分の名前を知っている。最初に自己紹介をし、そうして初めて人に知られるということが、どんなにすばらしかったことか。(KKAP 288)

三十歳の誕生日の朝、K は突然逮捕を通知されてとある訴訟に巻き込まれていく。この訴訟は「法治国家」(KKAP 11)にある一般的な裁判所によるものとは異なり、逮捕も通知されるだけである。それゆえに当初、K にとって逮捕は「あなた方の言うところの逮捕」(KKAP 23)にすぎず、裁判所もまた「自称裁判所」(KKAP 68)であり、訴訟は何の重要性も持っていなかった。だが次第に「訴訟についての考えがもはや頭から離れな」(KKAP 149)くなっていく。その過程で重要な役割を果たしているのが、ヨーゼフ・K にとって「重荷」と化する自身の名前、特にフルネームである。

2-1. 呼びかけ

ヨーゼフ・K という主人公の名前は最初の一文中で提示される。ところが作品全体を通して見ると、彼のフルネームはほとんど出てこない。冒頭の一文中に加えて、監督人の呼びかけ (KKAP 20)、K による審問の再現 (KKAP 45)、叔父から弁護士への K の紹介 (KKAP 133)、弁護士から裁判所事務局長への紹介 (KKAP 137)、僧から K への呼びかけ (KKAP 286, 288) の計七つの場面で出てくるのみであり、その大半が彼への呼びかけである。

呼びかけは人が存在するためになくてはならないものである。「主体は他者からの名指しに根本的に依存することによって『存在』することができる。」¹³⁾すなわち、呼びかけに應えることで、人はその存在が承認され、主体化される。¹⁴⁾この主体化は様々な位相で行われ、他の秩序においてはすでに主体化された存在であっても、別な秩序においては主体化前でありうる。¹⁵⁾逮捕以前のヨーゼフ・K は「法治国家」の秩序の下に身を置いていた。それが、逮捕通知という呼びかけを通して異質な法秩序に引き込まれる。すなわち、未知の裁判所が司る異質な法の下で主体化される。まさにそのような異質な世界からの呼びかけとして名前は用いられている。

この呼びかけの機能が最も明確に現われているのが、物語の後半に位置する「ドームにて」の章で緊張が最高潮に達する場面、僧が K へ呼びかける場面である。「ヨーゼフ・K !」(KKAP 286)と叫ぶ僧の呼びかけが、K に向けられているのは疑いようがない。呼びかけ

の言葉はKの名前であり、それゆえに彼は結局振り向かざるをえない。名前を呼ばれるということは、すでに相手に名前が把握されているということ、それゆえに、自分の認識には関係なく、相手の秩序にすでに組み込まれていることを意味している。つまりKは名前を呼ばれて逮捕を通知された時点で、裁判所の支配下にあったのだ。ここでは名前を把握するということが、個人を支配するための手段の一つとなっていると言える。

2-2. 家族の名前

名前での呼びかけにKが抗うことができないのは、それが自分の名前だからというだけではない。訴訟に対して何ら手段を講じないKに対して、叔父は次のように戒める。

「ヨーゼフ、愛するヨーゼフ、自分のことを、お前の親類のことを、我々の立派な名前のことを考えろ。」(KKAP 122)

ヨーゼフ・Kの名前が叔父のアルベルト・Kの名前と並べて置かれたとき、その共通項が際立つ。つまり、Kという姓が、である。姓そのものは縮められた、不完全なものであり、それゆえに「素性や環境」を何ら明らかにしない。だがここでKという姓は、二つ並べられることによって一つのコンテキストを作り出す。ヨーゼフとアルベルトは、共通の姓に結びつけられた一族なのだ。そしてまた、この一族というつながりはKの訴訟と決して無関係ではない。Kが訴訟から目をそむけることができなくなる転機となっているのが、この叔父であり、叔父が訴訟に打ち込むようKを説き伏せ、弁護士のもとへ連れてゆくのは、まさにこの甥が一族の一員であるからにはほかならない。叔父が彼を説得するのは、K自身のためというよりも、むしろ一族の名前ゆえなのである。

裁判所と家族、Kの名前は二重の支配の下に置かれている。ヨーゼフ・Kという名前が呼ばれるとき、彼が聞くのは、彼個人の名前であって、彼個人の名前ではない。彼は個人としての自分の名前を聞きながら、同時に一族の名を聞くのだ。それゆえにこそ、呼びかけは一層強くKに作用する。彼の名前そのものが一族という「重荷」を背負っており、彼はそのことから逃れることができない。Kという個人は、名前を通じてそして名前のうちに支配されている。

3. K—『城』

『失踪者』においても『訴訟』においても、物語の冒頭部分で主人公の名前が呼ばれ、確認された。『失踪者』のカールはパスポートを提示しながら名乗り、『訴訟』のヨーゼフ・Kは名前でも呼びかけられる。カールのパスポートに当たるものが、ヨーゼフ・Kにおいては出生証明書であり、不当にも住居に侵入し、逮捕を通知してきた監視人たちに対して、ヨーゼフ・Kは自転車許可証と出生証明書を提示する。ところが、最後の長編作品となった『城』では主人公Kが自ら名前を明かすことはなく、少なくともその場面は描かれず、

そして相手から確認されることもない。自分が何者であるかという証明をしない彼の名前は、会話や記録から抜け落ちている。

3-1. 名前との乖離

名前の最も基本的な役割は同定にある。すなわち、名前と名指される者とは、一対一の関係とみなされる。『城』においてももちろんKの名前はその役割を担っているが、しかしそれは地の文に限られていると言っている。『城』はその大半が対話によって成り立っている作品である。¹⁶⁾ その大部分を占める、村人たちの言葉を直接に伝える直接話法の対話において、Kの名前はごくわずかの例外を除くと口にされることがない。

名前は、その持ち主の全てを表す。ゲーテはある手紙において「自分の名前を名乗るとき、私は自分の全てを名乗っているのだ」¹⁷⁾と書いている。このような特性ゆえに、名前と持ち主は時に魔術的に結びつき、グリム童話のとある小人は名前を言い当てられて我と我が身を引き裂く。¹⁸⁾ところが、『城』におけるKの名前は、村人たちに「自分の全て」を伝えるものではない。一つには、バッハマンが指摘するように、名前そのものが「素性や環境」を示さない名前だという点が理由として挙げられる。もう一つの理由は、彼がよそ者であるという点にある。

名前が意味を持つ際、その根底には名指される者と名前との一致がある。¹⁹⁾よそ者とは、村人たちにとって「何者でもない者」(KKAS 80)であり、その名前は村人たちに対して何ら意味をなさない。さらには、読者にさえも彼の過去は明かされない。名前に付随するはずの経歴がそこには欠けているのだ。それゆえに、村人たちがKを把握する手段は、彼自身の言葉と彼の外見に限られる。

ところが、彼の外見もKの素性を探る手掛かりにはならない。シュヴァルツァーは、Kについて次のように城に報告する。

シュヴァルツァーと名乗った若い男は、どのようにKを発見したかを語った。30代男性、実にみすばらしく、わら布団の上にすやすやと眠っており、枕にはちっぴけなリュックサック、手の届く範囲には節くれだった杖。(KKAS 11)

所有物は持ち主の身分や立場を如実に物語る。『失踪者』ではカールの所有物は彼の立場が変化するたびに変わっていく。だが、『城』のKは彼の身分や職を表すようなものを持たない。シュヴァルツァーは、何も持たないKを「胡散臭い」(Ebd.)と判断する。

先に引用した報告にKの名前は含まれない。身元を問われたKは次のように答える。

「それはそうとして言わせていただくと、私は伯爵が呼び寄せた測量士なのです。私の助手と機材は明日車で後からやってきます。」(KKAS 9)

Kは名前を名乗らず、「伯爵が呼び寄せた測量士」であるとだけ答える。だが、それを証明

するような任命書の類は一切提示しない。「測量士の痕跡は何もありませんよ、けちなうそつきの浮浪者です、たぶんもっとひどいやつでしょう」(KKAS 12) とされるのもやむをえない。「助手」や「機材」といったものは、測量士としての立場を裏づける一種の証明であると受け取れるものの、それがいわば口から出まかせの言葉であることは、その後のKの態度が明らかにしている。²⁰⁾ところが城は彼を測量士と認め、測量士という職業名がKの名前の代わりを果たすことになる。

3-2. 書かれない名前

名前の代わりに職業名で呼ばれるのは、Kに限ったことではない。『城』の作品内世界は様々な職業によって構成されており、多くの人物が職業名で呼ばれている。その一方で、「役所と生活が絡み合っている」(KKAS 94) がゆえに、城の役人個人の名前は役職名と同等の力を持つ。

Kの測量士への任命は、城からの一方的なものではない。城からの任命書というべきクラムからの手紙を、村長は次のように解釈する。「あなたはただ『ご存知のように』採用されているのです。すなわち、あなたが採用されているということに対する立証責任はあなたにあるのです」(KKAS 114)。城の役所が採用を通知するのではなく、職務を引き受けるかどうかはK自身の判断に委ねられている。「Kが申告し、その時以来、手紙に言われているように、彼は採用されていることを知っているのだ」(KKAS 43)。ところが、この手紙には肝心のKの名前が欠けている。二通の手紙はいずれも宛名人が書かれておらず、一通目の手紙の最初には「拝啓」(KKAS 40)、二通目には「橋屋の測量士殿」(KKAS 187)と書かれている。文中にもKの名前は見当たらない。すなわち、この手紙はKに届けられはしたものの、宛名となっている測量士がKである必要性はどこにもないのだ。

「あなたについては全部分かっているのよ、あなたは測量士でしょう」(KKAS 63) という初対面時のフリーダの言葉が端的に示しているように、Kの存在は測量士としてのみ認知されている。何ら測量士としての仕事もせず、仕事のための機材すら持っていないにもかかわらず、である。村長が説明するところによれば、測量士とは書類の行き違いが作り出した空位のポストである。測量士という既存のポストに身を置くことで、村に滞在する正当性を得ようとしてはいるものの、名前を呼ばれないKの存在は、K個人としては認められていない。

そのKが一度だけ自分の名前を口にする。クラムからの二通目の手紙を読んだ後、その返答の中で「測量士K」(KKAS 193)と名乗るのだ。Kの名乗りを受けて、彼の言葉を忠実に実現する城の役所は、城の秘書からの呼び出しという形で一度だけKの名前を呼ぶ。「測量士K」という、測量士というポストと自分の名前を結びつけた自称は、村で認知されている測量士という存在とK個人の存在を一致させ、ほかならぬ自分自身が測量士となることを目指していると捉えられるだろう。

ところが、彼の名前は書かれることがない。書かれないとは、「城とのつながり」(KKAS 362)を持たないこと、村において正式には認知されないことを意味している。それを証

明しているのが、バルナバスの一家だ。一家を襲った事件は、周知の事実であったにもかかわらず、書かれなかったがゆえに事件として認められなかった。「全ては城からきている」(KKAS 316) とされる村において、城の書類に名前が書き入れられていることは「城とのつながり」を証明する確実な手段である。それゆえに、秘書の審問を受け、記録されることが、「クラムへ通じている唯一の道」(KKAS 177) となる。書かれなかったバルナバスの一家は苗字を失い、彼らの姓はもはや口にされることがない。ところがKは、先述したクラムへの返答でも書面にすることを断固として拒否し、書かれること一切を拒絶する。承認を求めると同時に承認されることを拒否するKの態度が、名前に対する彼の態度に集約されて現れている。

4. F. K.

1911年10月のイディッシュ語劇団との出会いをきっかけに、カフカの関心は自分の出自であるユダヤ的なものに向かうようになる。そのとき、彼が真っ先に目を向けたのは自らの名前だった。

私はヘブライ語でアムシェルという。母親の母方の祖父と同じで、母の記憶では彼は長い白髭の敬虔で学識のある人だった。彼が亡くなったとき母は6歳だった。²¹⁾

ここでの名前は単に個人を名指すためのものではない。名前はその出自を明示するものとして捉えられており、アムシェルの名は祖父の名に直結される。さらには、「フランツ」がヘブライ語の「アムシェル」に言い換えられることで、彼の名が同化した名であること、出自から切り離された名であることが明らかにされる。

カフカは大量の手紙を残しているが、彼の手紙の中から「フランツ・カフカ」というフルネームの署名を探すことは案外難しい。大抵の手紙では、「フランツ・K」か「F・カフカ」と、姓か名のどちらかが略されている。親しい相手への手紙だとさらに短く、「F. K.」もしくは「F」のみ「K」のみの署名も多い。見知らぬ相手に書く場合ですら、カフカがフルネームで署名するのはまれである。婚約の許しを得るためにフェリス・パウアーの両親に宛てた手紙ですら、省略された形で署名されている。端的に「私」を書く行為である署名は、カフカにとって「私を当惑させる唯一の質問」²²⁾ であり続けた。

署名について、カフカはフェリスに次のように説明したことがある。

私は責任というものを蛇のように避けるのです。たくさんものに署名しなければなりません、回避できた署名はどれも私にはもうけもののように思えるのです。私は全てに(本当はしてはいけませんが)FK とのみ署名します。あたかもそうすることで自分を重荷から解放できるかのように。それゆえにあらゆる事務用品の中でもタイプライターに惹かれるように感じるのです。というのも、タイプライターの仕事は、

たとえタイピストの手でなされていても、匿名的だからです。重要なものですら読み通さずにあのFKで署名することで、そしてさらに持ち前の忘れっぽさで一度机から離れたものは全て私にとっては手元にあったことなど一度もなかったことにすることで、この、その他のことであれば賞賛に値する用心深さは補完され、高められるのです。²³⁾

職場の書類における署名は、書かれている事柄に対する責任をとまうがゆえに、署名の省略は責任の回避につながる。フルネームで署名されていれば、個人を同定することは比較的たやすい。しかしイニシャルとなるととたんに曖昧になる。同じ職場にフランツ・カフカは二人いなくとも、FKのイニシャルを持つ人物が複数いることは大いに考えられる。イニシャルでの署名は、実際にその戦略が功を奏することはないにしても、名前を多義的にすることで責任の所在を曖昧にしておもうとする一種の戦略である。タイプライターが匿名的なのは、その文章を打った人物が分からないからである。多義的な署名は、タイプライターで書かれた文字と同じく、匿名的な署名なのだ。

フェリスやミレナに宛てた手紙には、より匿名的と言える次のような署名が散見される。

あなたの

手紙の末尾に書かれたこの言葉の次には、本来ならば差出人の署名が続くはずである。しかしここではもはやイニシャルすら書かれていない。署名のあるべきところには空白があるのみだ。手紙の署名を書かないことは、書類と違って、責任を回避するためではない。空白の署名には、「名前もなく、完全に消えてしまった『あなたの』であれば」²⁴⁾、「もはや私は名前さえも失いました、名前は短くなり続け、いまや、『あなたの』に」²⁵⁾といった説明がつけられる。ここにおいて署名は、相手からの分離を意味するものになる。

ここで回避されているのは、職場の書類と同じく、個人の同定であると言える。署名することによって、差出人は宛名人から完全に分離した個人として同定される。つまり、「あなたの」ではなく、「他人」に、差出人個人になる。それゆえにこそ、女性宛の手紙において名前を書かない、名前をなくすということが、「あなたの」になること、つまり相手との一体化として夢想されている。²⁶⁾

おわりに 支配する名前

書類への署名、手紙への署名、いずれにおいてもフルネームでの署名をカフカは意図的に避けている。大部分の署名は省略され、特定の個人を同定することが困難になるように仕向けられている。つまり、匿名化されている。その意味で、彼の署名は署名の用をなさない。

カフカにとって名前とは何だったのか。冒頭に挙げた一文を再度引用する。

(Kは醜く、ほとんど不快に感じるが、それでもなお私はKと書く。Kは非常に私に似つかわしいものであるに違いない。)

このカッコでくくられた一文は、家族の動向を記した短い文章の中に挿入されている。²⁷⁾ここで「K」は原文では複数形 die K とされており、この文章の前後にあるカフカ家 (Kafka) の人々を指していると考えられるが、それを「書く」という表現から、このKは同時に名前を指している。Kは家族を結びつける言葉であり、カフカもまたそこから抜け出すことはできず、その帰属が彼を特徴づける。この数か月後に執筆を開始した『訴訟』で、カフカは主人公をKと名づけた。

本来ならば差出人や責任の所在を明示するものであるはずの署名に、カフカは匿名性を求めた。この矛盾は、カフカが名前を強く意識し、名前の支配から脱却しようと試みていた、それも彼の「書くこと」の中で試みていたことを示している。そうであるがゆえに、Kのイニシャルを持つ者たちの物語の中核に、名前の問題があるのだ。ヨーゼフ・Kは名前の支配ゆえに未知の裁判所から逃れることができず、カール・ロスマンが約束されていたはずの新たな生を手に入れるには改名するしかない。唯一、『城』のKのみは自由に見えるものの、自由であるからこそ逆に帰属を求める。彼らの名前は、固有名とその持ち主がイコールで結ばれるという名前の性質、そしてそれに由来する名前の持つ支配的な側面を照らし出す。彼らが共有する「K」が、否応なく名前そのものを問題化するのだ。

注

使用するテキストは以下の通りであり、引用に際しては略記号と頁数をカッコ内に記す。

KKAV = Kafka, Franz: Der Verschollene. Hrsg. von Jost Schillemeit. Frankfurt a. M. (Fischer) 1983.

KKAP = Kafka, Franz: Der Proceß. Hrsg. von Malcolm Pasley. Frankfurt a. M. (Fischer) 1990.

KKAS = Kafka, Franz: Das Schloß. Hrsg. von Malcolm Pasley. Frankfurt a. M. (Fischer) 1982.

- 1) Kafka, Franz: Tagebücher. Hrsg. von Hans-Gerd Koch, Michael Müller u. Malcolm Pasley. Frankfurt a. M. (Fischer) 1990, S. 517.
- 2) Brod, Max: Nachwort zur ersten Ausgabe. In: Franz Kafka: Amerika. In: Franz Kafka. Gesammelte Schriften. Bd. II. Hrsg. von Max Brod. New York (Schocken) 1946, S. 312.
- 3) Vgl. Debus, Friedhelm: Namenkunde und Namensgeschichte. Eine Einführung. Berlin (Erich Schmidt) 2012, S. 207-210. ならびに、前田佳一「名前の詩学への導入——インゲボルク・バッハマンの講演『名前との付き合い』を手がかりに」(前田佳一編『名前の詩学——文学における固有名あるいは名をめぐる諸問題』日本独文学会研

究叢書110、2015年、4-5頁）参照。

- 4) Vgl. Ebd., S. 210-215.
- 5) Bachmann, Ingeborg: Der Umgang mit Namen. In: Dies: Werke. Hrsg. von Christine Koschel, Inge von Weidenbaum, Clemens Münster. München (Piper) 1978, S. 238-254, hier S. 242.
- 6) カフカは登場人物の名づけを放棄しているのではなく、むしろ過剰ともいえるほど名づけている。その名前のほとんどは、体を表す名と分類する名に当てはまる。登場人物の名前については次の文献にまとめられている。Vgl. Rajec, Elisabeth M.: Namen und ihre Bedeutungen im Werke Franz Kafkas. Ein interpretatorischer Versuch. Bern / Frankfurt a. M. / Las Vegas (Peter Lang) 1977.
- 7) Bachmann, a. a. O.
- 8) Benjamin, Walter: Franz Kafka. Zur zehnten Wiederkehr seines Todestages. In: Walter Benjamin Gesammelte Schriften. Bd. II-2. Hrsg. von Rolf Tiedemann u. Hermann Schweppenhäuser. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1977, S. 409-438, hier S. 417.
- 9) Ebd.
- 10) Vgl. Neumann, Gerhard: Franz Kafka. Experte der Macht, München (Hanser) 2012, S. 203.
- 11) ネグロの名は、カフカが参照していたホリチャーの『アメリカ 今日と明日』に載せられた写真「オクラハマ [オクラホマの誤記：論者注] の牧歌」に由来するとされている。Vgl. Holitscher, Arthur: Amerika. Heute und Morgen. Berlin (Fischer) 1912, S. 367.
- 12) アメリカにおけるカールの歩みは、ドゥルーズとガタリの用語を用いるならば、故郷からの脱領域化とアメリカへの再領域化の試みだったと言える。だが、オクラハマ劇場のあり方は、脱領域化した状態にとどまり続けることを示唆している。さらに、ハーマンは当時のアメリカ旅行記の記述を根拠に、ネグロという名前の中にアメリカ社会から脱領域化された異質性を読み取るとともに、この名を「解放された名前」と位置づけている。Vgl. Deleuze, Gilles / Guattari, Félix: Kafka. Für eine kleine Literatur. Übers. von Burkhard Kroeber. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1976; Hamann, Christof: Roßmanns Zerstreuung. In: Odradeks Lachen. Fremdheit bei Kafka. Hrsg. von Hansjörg Bay u. Christof Hamann. Freiburg im Breisgau / Berlin (Rombach) 2006, S. 115-144, hier S. 141.
- 13) Butler, Judith: Haß spricht. Zur Politik des Performativen. Übers. von Kathrina Menke u. Markus Krist. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 2006, S. 15.
- 14) ルイ・アルチュセール (柳内隆訳) 『イデオロギーと国家のイデオロギー装置』(ルイ・アルチュセール、柳内隆、山本哲士『アルチュセールの〈イデオロギー〉論』、三交社、1993年、9-111頁)。呼びかけの理論については特に87頁参照。
- 15) それゆえに、アルチュセールは様々なレベルのイデオロギー、家族的イデオロギーや宗教的イデオロギーなどを提示する。

- 16) 『城』は三長編小説中最も対話の場面が多く、作品全体の約70パーセント強が対話からなっており、その大半が直接話法で描かれている。Vgl. Krusche, Dietrich: Kafka und Kafka-Deutung: Die problematisierte Interaktion. München (Fink) 1974, S. 52.
- 17) Goethe, Johann Wolfgang von: Goethes Briefe. Bd. I. Hrsg. von Karl Robert Mandelkow unter Mitarb. von Bodo Morawe. Hamburg (Wegner) 1968, S. 102.
- 18) Vgl. Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen der Brüder Grimm. Bd. 1: Märchen Nr. 1-86. Hrsg. von Heinz Rölleke. Stuttgart (Reclam) 1980, S. 288.
- 19) Debus, Friedhelm, a. a. O., S. 41ff.
- 20) Kの態度は即興的であり、彼の言葉はその場に応じて変化する。Vgl. Robert, Marthe: Das Alte im Neuen. Von Don Quichotte zu Franz Kafka. Übers. von Karl August Horst. Frankfurt a. M. (Fischer) 1984, bes. S. 225.
- 21) Kafka, Franz: Tagebücher, a. a. O., S. 318.
- 22) Kafka: Briefe 1902-1924. In: Franz Kafka. Gesammelte Werke. Hrsg. von Max Brod. Frankfurt a. M. (Fischer) 1958, S. 338.
- 23) Kafka, Franz: Briefe. 1900-1912. Hrsg. von Hans-Gerd Koch. Frankfurt a. M. (Fischer) 1999, S. 348f.
- 24) Kafka, Franz: Briefe. 1913-1914, a. a. O., S. 188.
- 25) Kafka, Franz: Briefe an Milena. Erweiterte und neu geordnete Ausgabe. Hrsg. von Jürgen Born u. Michael Müller. Frankfurt a. M. (Fischer) 1986, S. 67.
- 26) ミレナ宛の手紙から次第に署名が消えていくことに関して、クレマーはユダヤの伝統と結びつけながら、アイデンティティを拒否するカフカの姿勢が現われたものであるとしている。Vgl. Kremer, Detlef: Kafka. Die Erotik des Schreibens: Schreiben als Lebenszug. Frankfurt a. M. (Athenäum) 1989, S. 163f.
- 27) カッコの前は次のようになっている。「14.5.27 母親と妹はベルリン。私は父親と夜二人きりだ。父親は上がってくることを恐れているように思う。父親とカードをするべきだろうか。」ここで「K」は、直前の文中にある「カード (Karten)」という語からの連想で出てきたものだと考えられる。それゆえに「K」は「K という文字」を指しているとも受け取れる。

„Die K.“ – Kafkas Umgang mit Namen

Risa SHIMOZONO

Der Name ist für Kafka etwas Besonderes. Das zeigen die Namen der Protagonisten in seinen Romanen und sein Umgang mit Unterschriften. Karl Roßmann, Josef K., K., diese Protagonisten haben einige Gemeinsamkeiten. Eine davon sind ihre Namen: diese Namen stammen alle von Kafkas Namen ab und haben alle die Initiale K. Der charakteristische Name K. ist nicht nur die Abkürzung von Kafka, sondern nach Bachmann ein neuer Name, der nichts bedeutet. Kafkas Romane kreisen immer um den Namen. Der Name, als die kürzeste Beschreibung des Ichs, repräsentiert das Problem des Schreibens, weil Kafkas Schreiben im Grunde darauf abzielt, das Schreiben mit dem Leben zu vereinen. In dieser Arbeit geht es um das Verhältnis zwischen dem Namen und Kafka selbst. Unter diesem Aspekt wird auch auf seine Romane Bezug genommen.

In „Der Verschollene“ wird der Name Karl Roßmann mehrmals erwähnt. Jedes Mal, wenn er eine neue Karriere beginnt, muss er sich vorstellen. Amerika ist für Karl ein utopischer Ort, von dem er sich eine neue Existenz und einen neuen Lebenslauf verspricht. Aber in Wirklichkeit ist er in Amerika nicht von der Vergangenheit befreit, worauf sein deutscher Name verweist. Der Wendepunkt ist der Rauswurf aus dem Hotel Occidental, denn hierbei verliert Karl alles, was ihn als ihn bestätigt. Jetzt findet er den Eingang zu einem tatsächlich utopischen Amerika, nämlich zum Theater von Oklahoma. Dieses Theater steht zu Karls Namen in einer doppelten Beziehung. Einerseits bezeichnet sein Familienname (Roß und Mann) den Rennplatz, wo die Eintrittsprüfung stattfindet. Andererseits verliert er dort seinen Namen und nennt sich dann „Negro“. Sein neuer Name steht für seine schlechte wirtschaftliche und gesellschaftliche Situation, trotzdem kann er mit diesen Namen endlich eine neue Existenz beginnen, weil der Name mit seiner Vergangenheit in keiner Verbindung steht. Gleichzeitig deutet der Name auch den Umstand an, dass Karl in Amerika weder Amerikaner ist, noch werden kann.

Für den Protagonisten in „Der Proceß“ ist sein Name „eine Last“. Im Roman wird sein Name Josef K. als Anrede benutzt. Die persönliche Existenz hängt von anderen ab: Erst durch die Anrede wird man anerkannt und erhält seine Existenz bestätigt. Auch von dem (ihm fremden) Gericht wird K. mit seinem vollen Namen angeredet. Allerdings zeigt diese Anrede auch, dass K. unbemerkt unter der Gewalt des Gerichts steht, weil es schon lange seinen Namen kennt und es sich so K. zu eigen macht. Es gibt noch einen weiteren Grund, warum K. sich dem Prozess nicht entziehen kann, nämlich seinen Onkel Albert. Josef und Albert benutzen naturgemäß den selben Familiennamen – K. Seine Familie ist auch der Grund dafür, warum Josef diesen Prozess führen muss. So vernimmt er in der Anrede immer seinen persönlichen Namen und gleichzeitig auch den Namen seiner Familie, von

deren Abhängigkeit er sich nicht lossagen kann.

Anders als die anderen beiden Protagonisten, nennt K. in „Das Schloß“ seinen Namen nicht. In „Der Verschollene“ und „Der Proceß“ werden die Namen der Protagonisten am Anfang von ihnen selbst bestätigt. In „Das Schloß“ wird zwar auch nach K.s Identität gefragt, aber sein Name wird nie erwähnt. Er stellt sich nur als Landvermesser vor. Es ist klar, dass K. sich als Landvermesser ausgibt, nur um eine Unterkunft zu erhalten. Trotzdem nennt ihn das Schloss einen Landvermesser und schickt ihm zwei Briefe, die als Ernennungsschreiben fungieren. Aber als Adressat steht dort nur ‚Landvermesser‘, und K.s Name bleibt weiterhin ungenannt. Die Anstellung als Landvermesser wird so zur Leerstelle, die die Korrespondenz zwischen dem Schloss und dem Dorf beliebig macht. Weder muss K. der Adressat der Briefe, noch Landvermesser sein. Nur einmal nennt er in der Antwort auf Klamms Brief seinen Namen und die Profession zusammen und möchte in diesem Zuge als ‚Landvermesser K.‘ bestätigt werden. Dennoch verweigert er die entscheidende schriftliche Bestätigung ans Schloss, sondern bittet Barnabas um eine mündliche Mitteilung, womit K.s Name weiterhin ungeschrieben bleibt.

Der Umgang der Figur K. mit seinem Namen spiegelt Kafkas Verhältnis zu seiner eigenen Unterschrift wider. Kafka selbst hatte immer Schwierigkeiten mit dieser. Einmal erklärte er Felice, dass er seine Unterschrift vermeiden würde, indem er seinen Namen *abkürzte*. Er versuchte damit, ganz entgegen ihrer eigentlichen Funktion, seine Unterschrift zu entpersonalisieren. Seine ideale Unterschrift findet sich in den Briefen an seine Frauen. Dort steht nur „Dein“ ohne Kafkas Name. Das Verschwinden des Namens bedeutet für Kafka die Vereinigung mit dem Adressaten, wohingegen die Verwendung seiner Unterschrift zur Identifizierung mit sich selbst und damit wieder zu einer Trennung vom Adressaten führen würde. Sein Name beherrschte und charakterisierte Kafka. Mit seiner bis zur Anonymität reduzierten Unterschrift unternahm er den Versuch, sich von seinem eigenen Namen zu befreien. Die Protagonisten, die die gemeinsame Initialen haben, teilen dieses Problem mit ihm.